

## 第36回日本プラセンタ医学会大会開催にあたって

### 胎盤抽出物（PE：placental extracts）治療との出会いから現在まで —胎盤抽出物治療の必要性—

大会実行委員長 川口 光彦  
医) 川口内科 川口メディカルクリニック 院長

肝臓専門医として医療従事してから早や40年あまり経過しました。40年間、寝る間も惜しんですべての肝臓病の患者様の完治をめざして日夜いろいろなことに取り組んできましたが、ある時、基幹病院での肝臓診療に限界を感じ、一転肝臓病の発症予防医療の構築をめざして平成18年に世襲開業しました。開業後外来診療をしていたある日、長年C型肝炎でフォローしていた女性が、掌蹠膿疱症という難治性皮膚疾患に連日悩まされ、いろいろな医療機関に通院した挙句、この疾患の権威である四国の皮膚科医にたどりつき、その先生から胎盤抽出物治療を勧められ、“その治療を受けさせてほしい”と相談しに来られたのが、私と胎盤抽出物治療との出会いでした。その後ラエンネックという注射薬が肝臓病の治療に保険適応であるということを知り、以後多数の肝臓病患者にラエンネックを投与してきました。さらにメルスモンという注射薬の存在を知り、保険適応である更年期症候群に対しても治療を行ってきました。現在、月にラエンネックを44例、メルスモンを25例に投与しています。胎盤抽出物製剤にはHGF、EGFという成長因子が含まれており、この薬剤を投与することで、肝細胞、皮膚細胞の増殖作用が活発になることが知られています（ラットの動物実験）。若いころ、劇症肝炎の病態のように急速かつ重篤に臓器の萎縮・変形をきたすような疾患を治療する際に、傷害を受けた肝細胞がどんどん増殖していくような薬剤が世の中に実在するかどうか文献でよく調べたものでした。ラエンネックという胎盤抽出物製剤は、肝疾患治療を専門的に行っている私にとって非常に興味のある薬剤のひとつでした。そこで難治である肝硬変患者に肝細胞増殖を期待する目的でラエンネック投与を開始して、今に至っています。最近では脂肪肝炎に対しての効果を検討しています。



一方、胎盤抽出物治療はいろいろな医療機関で保険外診療に多く使用されています。ただデータベースのないところでいろいろな使われ方をしているため、世の中では胎盤抽出物治療に対して偏見も生じています。まっとうに使用している医師たちは、このような状況のため、胎盤抽出物治療に憚(はばか)れることもしばしばです。

2016年10月9日第20回日本胎盤臨床医学会を岡山で開催して以来、9年ぶりに岡山の地で、学会名称変更となった日本プラセンタ医学会を開催することになりました。特別講演として東京医科大学医学総合研究所未来医療研究センター 分子細胞治療研究部門 特任教授 落合孝弘先生、地方独立行政法人岡山市立総合医療センター岡山市立市民病院副院長 狩山和也先生、国際医療福祉大学三田病院放射線診断センター准教授、加齢画像研究所 所長 奥田逸子先生の3名の方々にご登壇していただき、各分野の得意とするお話を聞かせていただくことにしています。さらにランチセッション、スポンサーセミナー、プラセンタ治療のエキスパートの先生方のパネルディスカッションを行い、学会を盛り上げていただく予定です。当日は年に1回行われる岡山市のビックイベントであります岡山市民マラソンと重なってしまいましたが、副委員長の金子法子先生と力を合わせて学会を成功させたいと思っています。皆様の忌憚のないご意見をお待ちしています。